

氏 名 : 畠山 寛
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第 319 号
学位授与年月日 : 平成 31 年 3 月 15 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士
学位論文名 : 保育実践場面における保育者の「行為の中の省察」
論文審査委員 : (主査) 教授 首藤 敏元
(副査) 教授 岩立 京子 教授 松寄 洋子
教授 倉持 清美 教授 吉川 はる奈

学位論文要旨

1. 幼児教育の重要性と保育の質 幼稚園教育要領などには、幼児期は「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な時期である」と記されている。また、ペリー就学前教育などの介入研究において、幼児期の教育が発達期の教育的効果だけではなく、成人期の経済的な効果に影響することが示されている。このように幼児教育の重要性が指摘される中、OECD では「保育の質」に関する議論が行われ、①志向性の質、②構造上の質、③教育の概念と実践、④相互作用あるいはプロセスの質、⑤実施運営の質、⑥子どもの成果の質あるいは成績の基準、⑦親・地域への支援活動と両者の参加に関する妥当な基準、といった質や規準があることを示している。本研究では、保育の質の中でも保育者と子どもの関わりである「プロセスの質」に注目することとした。

2. 省察的実践家としての保育者 保育実践場面において、保育者には「今ここ」の子どもの状態、場面の文脈的・固有性などによって臨機応変な子どもへの対応が求められる。このような臨機応変な対応においては、実践のまさにその最中に実践者が状況と省察的に対話しながら行っている行為、認知、判断といった暗黙の<わざ>が発揮されると考えられることから、保育者は省察的実践家であると理解できる。そのため、本研究では、省察的実践家の認識論である「行為の中の省察」及びフレームが、保育実践場面の保育者において、どのように働いているのかについて検討することにした。

3. 保育における省察研究と研究の目的 保育の省察研究においては、保育後の振り返りに関する研究が主に行われているものの、省察的実践家の認識論である「行為の中の省察」、つまり、実践の最中の省察については質的に検討されていない。また、「行為の中の省察」と密接に関連するフレームの働きについても検討されていない。これを明らかにすることができれば、子どもとの関わりが求められる保育実践の質的な向上が期待される。そこで、本研究では、1) 保育者の状況理解におけるフレームの働き、2) 保育者の「行為の中の省察」の過程、3) 保育者の「行為の中の省察」の内容について明らかにし、保育者の子どもへの関わり方、保育者養成に関する方法について考察することを目的とした。

4. 保育者の状況理解におけるフレームの働きに関する検討 この研究では、自由遊びの「今ここ」

の状況を、保育者がどのようなフレームによって理解しているのかについて幼稚園教諭3名（保育歴8年以上）を対象に検討した。自由遊び場면을撮影し、その後、保育者の対応の意図などについて半構造化面接を行い、得られた言語データの語りを分析した。その結果、①フレームによって問題状況を問題とし、問題を解決するために対応している、②複数のフレームによって、1つの問題状況から問題を構成する場合もあること、③保育者のフレームは、それ以前の子どもの関わりによって得られた子ども理解、保育者の発達観を基にした期待や願いが関連していることが明らかになった。

5. 保育実践場面における保育者の「行為の中の省察」の過程に関する検討 この研究では、保育者の「行為の中の省察」の過程について明らかにするために、幼稚園教諭5名を対象に「いざこざ」への対応や「人との関わりを育む」保育実践について想起してもらい、そのインタビューデータをグラウンテッドセオリー・アプローチによって分析した。その結果、保育実践における「行為の中の省察」は、「支援に関する判断」、「支援の結果に関する評価」、そして、「再支援の必要性に関する判断と実行」の3つの段階を含む一連の過程であることが示された。

6. 保育実践場面における保育者の「行為の中の省察」の内容に関する検討 この研究では、ベテラン保育者が記述した「いざこざ場面」に関する保育エピソード、及び、保育実践後のインタビューの内容について質的な分析を行い、その内容について考察した。その結果、保育者は、園生活の様子から導かれる子どもの特性、今現在の子どもの心情、子どもの言動から読み取れる育ちといった情報を利用し、「今ここ」の子ども姿を理解したうえで、子どもに対し願いや思いを持ち、その願いや思いを達成する方法を直感的に産出し対応する。そして、保育者の子どもに対する願いや思い、達成されたかどうかを確認するといった「行為の中の省察」の内容が明らかになった。

7. 総合考察 3つの研究から、保育者は、保育実践場面において、フレームによる状況理解・子ども理解を行い、その後、子どもに対する願いや期待を持ち、対応すること、また、当初の対応がうまくいかない場合には、異なる働きかけを産出し、再度、働きかけることなどが明らかになった。これらの点を考慮し、「行為の中の省察」の質を向上するための方法論的な示唆について、1) 保育者が省察的实践家であることを理解する、2) 自身が持つフレーム分析を行う、3) 「行為の中の省察」についての省察を行うことを提案した。また、今後の課題として、1) 保育者が持つフレームの特性について明らかにすること、2) 保育実践において「行為の中の省察」を生起させる要因の検討の必要性について指摘した。